第３１号（2018 年夏）
編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

ボランティアがえらんだ 千葉市動物公園の見どころ7 セブンプラス

それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください。

①エサは努力して手に入れる
― チンパンジー ―

高い台から周囲を見ている雄のサンタと雌のジージョ。部屋の出入りや食事の時もお互いを確認しながら行動する仲良しです。サンタは人が集まってくると自分をアピールしたいのか、表情豊かに動き出し、草を投げることもあるのでご注意下さいね。

アフリカの野生のチンパンジーは、イチジク等の果物、葉、昆虫を食べています。当園では展示場のあちこちにに小松菜、レタス、人参、サツマイモ等の野菜を置くと探して食べます。ペレット（固形飼料）を短いホースに入れて渡すと、またもらえると学習して食べ終わるとすぐ返しに来るそうです。

朝は自分たちが寝ていた布団と交換に果物をもらったり、飼育係さんと体をふれ合うかんたんなトレーニングもしています。

②夜のしげみの小さなハンター
― ショウガラゴ ―

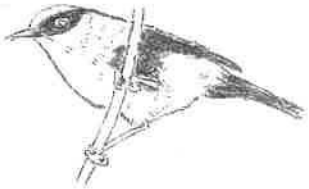
大きな耳に長いしっぽ。小さな体はまるでリスのようですが、アフリカにすむ原始的なサルの仲間です。別名ブッシュベイビー。夜行性で、暗闇でも見える大きな目を持っていて、耳もよく聞こえます。

おどろくべきは、自分の身長の 10 倍もの高さを跳ぶジャンプ力。野生では枝から枝へ素早く跳びまわり、好物の昆虫を捕まえます。雑食性なので、当園では果物や煮た根菜をきざんだものやサル用のペレット、ミルワームなどをあげています。

静かな世界で暮らす動物なので、大きな音にびっくりすると隠れてしまうことがあります。そっと観察してみてくださいね。約 10 頭のショウガラゴが、手を使ってエサを食べる様子や、跳びまわる姿を見ることができますよ。

③見られたらラッキー！　幸せの黄色い鳥
― コウライウグイス ―

インドネシアからロシアにかけてアジア大陸に広範囲に分布する渡り鳥です。体長は約 26cm、黄色い羽とアイマスクのような黒い模様が特徴で、漢詩に登場するウグイスはこの種です。日本では渡りの途中、まれに日本海側に来る程度なので、自然界で目にすることは多くはありません。



日本の動物園等で飼育しているのは、当園のオス１羽だけ。そのため、愛鳥家が一目見ようとはるばる遠くからやってくることもありますが、とても警戒心の強い鳥なので、天井付近や木の茂みに隠れていることが多く、見つけるには根気が必要です。すぐに見ることができたあなたは相当な強運の持ち主！　ぜひ挑戦してみてください。

④すばやい泳ぎでドジョウをとる
― コツメカワウソ ―

コツメカワウソはカワウソの仲間では一番小さい種類で、タイやマレーシア、ベトナム等の東南アジアの川や河口で 12 頭ほどの群れを作り生活しています。「コツメ」は小さい爪のことで、指より前に爪が出ることはありません。農地開発や森林伐採による生息地の減少や、水質の汚れによるエサの減少、毛皮用の狩猟などにより生息数は減少しています。

色々な鳴き声を持ち、その声やにおいでコミュニケーションを取ります。「ごはんがほしい」という時に、「ニャーニャー」と鳴いていることが多く、エサの時間や夕方部屋に戻る前によく聞くことができます。

水から出た後にかならず木や石に体をすりつけて水分を落とします。体を乾燥させて風邪をひかないように気をつけているんですね。

⑤国旗にも描かれている

―ホオジロカンムリヅル―

草原ゾーンの小高い山の上で、頭に冠羽、頬が白くて優雅に歩いているのがつがいのホオジロカンムリヅル。

生息地はアフリカ中央部から南部。渡りをするツルのように遠くへは行きませんが、雨期に赤道をはさんで渡ることもあります。野生では水辺や草原で魚や昆虫などを食べます。当園では穀類やツルフード（ドッグフードのようなもの）が主食ですが、展示場でもくちばしで土を掘りミミズや昆虫を探します。

オス・メスの体長は同じくらいで見分けはつきません。どういうわけか同じ仕草をするクセがありますのでよく観てね。アフリカのウガンダ共和国の国鳥で、国旗の中央に姿が描かれているのが、この鳥の自慢。

⑥さまざまな色と柄、どれが好き？

― テンジクネズミ ―

フワフワ、モコモコで温和なテンジクネズミ。もとは南アメリカで食用として家畜化された動物ですが、今はペットとしても世界中で愛されています。上下２本ずつの長い前歯が目立ちますが、奥歯もあり、固い干し草もよく噛んで食べます。ハツカネズミなどの赤ちゃんは最初はハダカでピンク色ですが、テンジクネズミは生まれたときから毛も歯も生え、目もあいていて、すぐにエサを食べられます。だからお母さんのおっぱいは２つしかないけど、１度に２頭～５頭生まれても大丈夫。

子ども動物園で１０時半～１２時、１３時～１４時、１４時半～１５時半にふれあうことができ、１４時１５分から橋を渡って食事に行くところも見られます（天候等により変更の場合があります）。

★ボランティアが毎月第２、第４日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイド「ZOO ボラ・クイズ DE ガイド」をしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

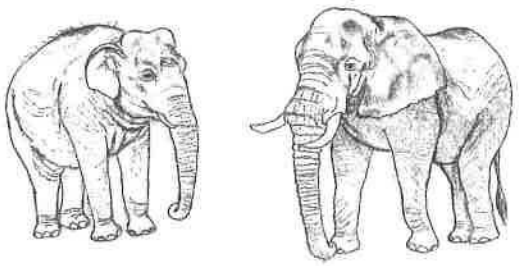
⑦アフリカゾウと見分けられる？

― アジアゾウ ―

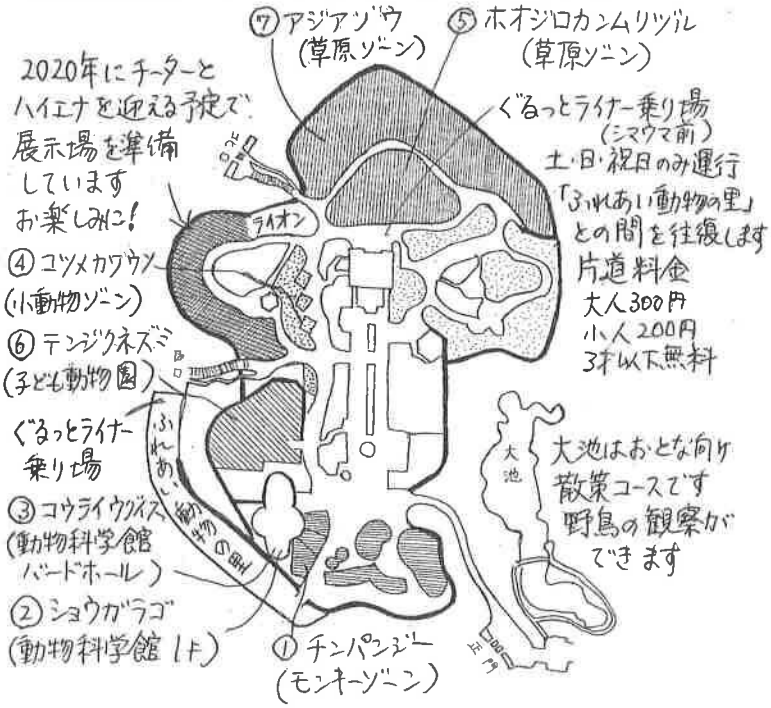
こどもの日にクイズをしたら、当園の人気者のアイちゃんがアフリカゾウかアジアゾウか知らない人が多かったので、見分けるポイントをご紹介しますね。

アフリカゾウの頭はデコボコのない平らな形、背中は肩と腰が高く真ん中がへこんでいます。アジアゾウの頭は正面からみて左右に２つのコブのような盛り上がりがあり、背中は真ん中が盛り上がって樽のような形です。その他にも、アフリカの砂漠地帯とアジアの森林地帯という環境のちがいは、たとえば気温の高いアフリカでは体温を下げるための耳もアジアゾウより大きくなったり、鼻先の形、ひづめの数、皮膚などにいろいろなちがいを生んでいます。ゾウ舎の屋内にはそんな両者の比較が掲示されています。

さて、それではアイちゃんはどっち？



★「絵本のおはなし会」が毎週土曜 11:30 より動物科学館２階図書室で開かれます。小さいお子さんはぜひどうぞ。



第32号　（2018年冬～2019年）
編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

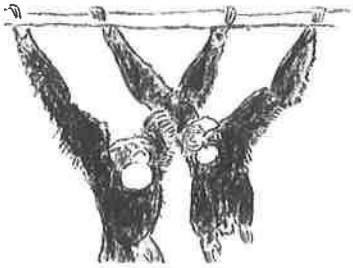
千葉市動物公園の見どころ7 セブンプラス

ボランティアがえらんだ

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください。

①ひびき渡る デュエット
― フクロテナガザル ―

マレー半島やボルネオの森にすむ類人猿の彼ら。視界の悪い森の中で、自分の縄張りや仲間の確認のため鳴き交わします。3㎞くらい届く大声の秘密は、頭と同じくらいにふくらむのど袋で、息を吸う時、吐く時、両方で声を共鳴させているからです。



メスが鳴き始めると、オスが高い声で後に続き、デュエットになります。複雑に声を使いわけ、手を口に当て声の調子を変えたりすることも。ぜひ自分の耳で聞いてみてください。

長い腕を使い、軽々と鉄棒を渡る姿は体操選手のようですね。池に手をのばし落ちた葉や花を食べることもありますが、水に入るのは苦手。池に囲まれた島の中は外敵から守られて安心できるので、泳いで脱走しようとはしません。

②身を寄せ合って　寒さに耐える
― ホンドザル ―

ホンドザルは日本の本州に生息しているニホンザルです。サルの仲間の中でもっとも北に生息する種で、青森県下北半島にすむホンドザルは「北限のサル」として知られています。けれども本来、サルは寒さが苦手。冬は彼らにとってきびしい季節です。

昨年の冬、当園はサル山に暖かいたき火のプレゼントをして、ホンドザルはじょうずにあたたまってくれるか、また、大好物のサツマイモをたき火の中に入れると焼きいもをじょうずに取って食べることができるか、観察してみました。この冬も、消防署の許可がおりれば何度か実験してみる予定です。

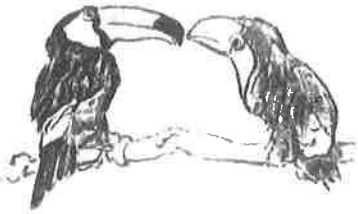
サル山で煙が上がっていたら行ってみてくださいね。

★ボランティアが毎月第2、第4日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイド「ZOOボラ・クイズDEガイド」をしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

③シャワーが大好きな　きれい好き
― オニオオハシ ―

寒い日には動物科学館のバードホールがおすすめです。熱帯雨林のような温室で、鳥が飛び交うのが見られます。フタユビナマケモノもいます。

ひときわ目を引くのは黒い体にオレンジ色の大きなクチバシのオニオオハシ。のびのびと飛び回れて水浴びもできるこの環境が気に入ったためか、2017年秋に来たばかりのペアに5月にヒナが誕生しました。11月現在、大きさはほぼ親と同じですが、クチバシが黄色いのでまだ子どもとわかります。



野生では南米アマゾン川流域にすみ、果実、昆虫、鳥の卵やハチュウ類を食べます。当園でのエサはくだもの、ゆで卵の黄身、コオロギ、ペレットなど。ほぼ毎日2時40分ごろスコールがあり、オニオオハシが気持ちよさそうに水浴びする姿が見られます。

④当園で12年ぶりの出産
― カリフォルニアアシカ ―

6月29日、カリフォルニアアシカのマリン（♀）とチャイム（♂）の間に待望の赤ちゃんが生まれました。オスで、名前はまだありません。海で生きるアシカも、わたしたちと同じ哺乳類。赤ちゃんは、お母さんのおっぱいを飲んで育ちます。マリンの初めての出産で心配もありましたが、愛情をたくさん受けて順調に成長しているようです。

ヒレのような前足を使って上手に泳ぐアシカですが、生まれてすぐはうまく泳げません。赤ちゃんも一生懸命泳ぎの練習をして、ずいぶんうまく泳げるようになりました。練習中はお父さんが背中に乗せてサポートする姿も見られました。仲良し親子を、ぜひ見に来てください。よーく見ると、耳たぶやかわいいしっぽもついていますよ。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

⑤たくましい後ろ足で　キック！

―オオカンガルー―

当園では現在、繁殖制限のためオオカンガルーはオスとメスを分けて飼育しています。のんびり暮らしているメスにくらべ、オスはメスが気になって仕方ない様子。しきりにメスの動きに注目し、時々誘うような声を出します。

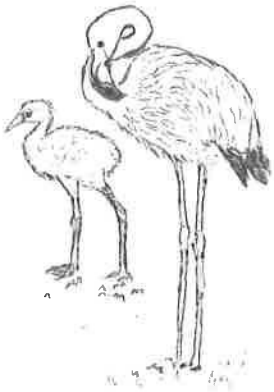
オスは群れの中の序列を確認するため、キックボクシングのような小競り合いをくり返します。真剣な戦いにはならず、弱い方が声を出したらそれで終わり。

「降参！」と言っているのでしょうか。始終あちこち体をかいていますが、かゆいだけではないらしく、戦う前に両者向き合って反り返りながらおなかをポリポリやることなどもあり、動作は人に似ているのに意味不明。なんとも不思議なカンガルーのコミュニケーションです。

⑥ミルクを与える父の愛

―ベニイロフラミンゴ―

８月21日、ベニイロフラミンゴのヒナが生まれました。フラミンゴの夫婦はとても仲が良く、協力して卵を温めます。そしてようやく生まれた赤ちゃん。羽の色は白で、ピンクになるには少し時間が必要です。ヒナは両親から出てくる栄養豊富なミルクで育ちます。お父さんからもミルクが出るなんて不思議ですね。フラミンゴミルクと呼ばれ、のどの奥からクチバシを伝って出てくるので、ほにゅう類のオッパイとはちがいます。このミルクの中には羽がピンクになる成分も入っていて、だんだん色が変化していきます。10月現在、ヒナはまだグレーがかった白です。ピンクになるのはいつなのか？みなさんもやさしく見守ってあげてください。



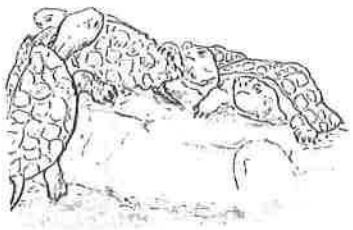
★ふだんはジッとしている動物も、食事のときは活発に動きますし、何をどんなふうに食べるのか、意外な発見があるかも。「食事時間のお知らせ」の園内放送がきこえたら、行ってごらんになることをおすすめします。飼育係さんに質問できるチャンスもあります。

⑦日本のカメを絶滅から守ろう

―　ニホンイシガメ　―

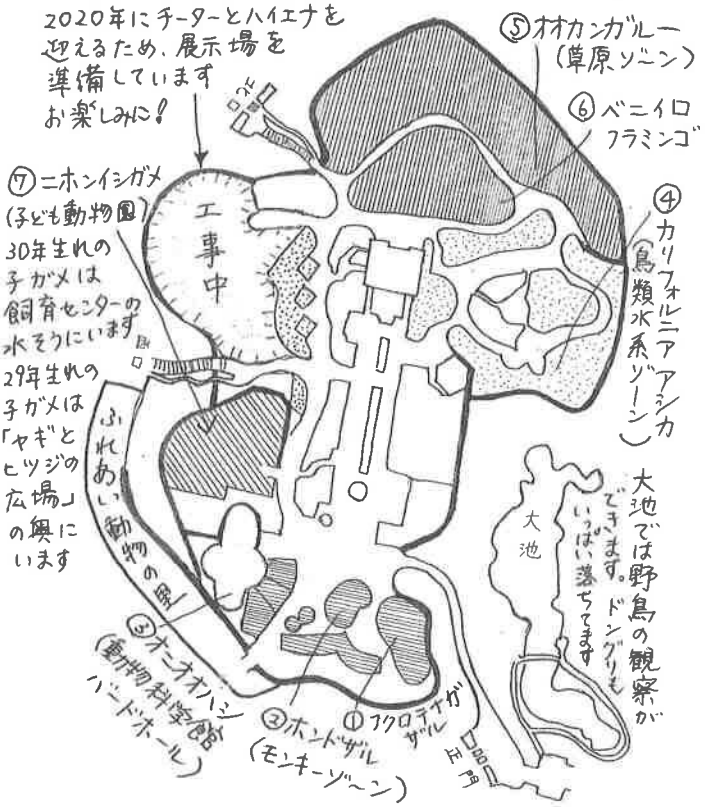
子ども動物園ではイシガメの保全活動に取り組んでいます。30年８月生れの子ガメ７頭は甲らの直径が3cm強で、黄色っぽくカラフルな姿。29年生れの子ガメ５頭は２倍くらいの大きさになりました。２年続けて子ガメが生まれ、これからも順調な繁殖が期待されます。

しかし、野生復帰はかんたんではありません。帰るべき川には外来種であるクサガメが多く、交雑してしまうのでイシガメの遺伝子を守れないうえ、アライグマに食べられる危険も高いのです。自然の中でイシガメが暮らせる場所を確保し、保護しながら増やしていくのが当面の目標となるそうです。



イシガメは昔話や浮世絵にも描かれる身近な生き物です。イシガメを守ることは生物多様性を維持するだけでなく、日本の伝統文化を守ることにもつながります。イシガメ保全活動は、トキやコウノトリの保全にも匹敵する大切な事業なのです。

★「絵本のおはなし会」が毎週土曜 11:30 より動物科学館２階図書室で開かれます。小さいお子さんはぜひどうぞ。



第33号（2019年夏）
編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の見どころ7+（セブンプラス）

ボランティアがえらんだ

★それぞれの動物が見られる場所は裏の地図をご覧ください。

①まぢかで見つめあえる
― オランウータン ―

（キャンデー）

東南アジアのボルネオ島とスマトラ島に生息するオランウータン。通常は森の木の上にいるので、当園でもメスのキャンデーは高い場所にいることが多いです。一方オスのフトシは人工保育で育てられたため、人間が好きで、よく地面に座って人を見ています。とくにガラスの前にいるときは、わたしたちもすぐ近くでその大きな体を見て迫力を感じることができます。枝にぶら下がるための長い手や指、オスの強さを示す顔の大きなひだも必見。また、100キロ近い巨体にもかかわらず、つぶらなひとみは可愛いです。

（フトシ）

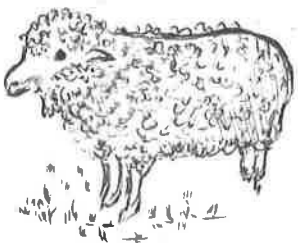
昨年日本平動物園からやって来たキャンデーはフトシに興味があるようですが、近づくとフトシは逃げ腰に。でも時には仲むつまじいところが見られることもあります。

②人の暮らしに欠かせない
― ヒツジ ―

皆さんは夜、眠れないとき、ヒツジが1匹、ヒツジが2匹…と数えたりしますか？本物のヒツジを子ども動物園に見に行きましょう。

ここにいるのは、ニュージーランド原産のコリデールという種類で、角はなく、おとなしくて、一緒にいるヤギにおされっぱなしのように見えます。

上唇は二つに割れていて上の前歯がなく、下の歯と唇と舌で上手に草をからめとって食べます。毛はどこまでも伸び続け、夏になる前に人間が刈りとって、糸や布、フェルトなどを作ります。モンゴルなどの国々ではフェルトを使って家を作ることもあり、ヒツジを飼っていれば衣食住すべてまかなえることになります。



日本でもヒツジは干支の中にいるくらい、人とは長い友だちなのです。

③ペンギンは　羽が命
― フンボルトペンギン ―

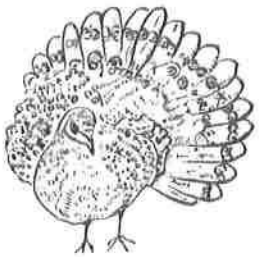
子ども動物園には今年2月に生まれたフンボルトペンギンの幼鳥がいます。大きさ・形は親と似ていますが、胸に黒帯模様がないのが子どもです。

卵からかえったペンギンのヒナは全身茶褐色のフワフワの羽におおわれています。この羽では泳げず巣穴で過ごします。2か月ほどで幼鳥の羽になり、巣穴から出てきて、約1年後の換羽（羽の生えかわり）までその姿です。おとなになってからも年に1度、1～1.5か月かけて全身の羽が抜け替わり、その間は水に入らず食欲もなくなります。普段も防水のためにお尻にある尾腺から油を出し、くちばしで全身にこすりつけて手入れをしています。それほどペンギンにとって羽は大切なものなのですね。

当園では梅雨前から換羽が始まり、夏には新しい羽で泳いでいます。

④小さいながら　クジャクの気品
― ハイイロコクジャク ―

東南アジアに広く分布するキジ科の鳥です。名前の通りクジャクより小さくて派手さはありませんが、オスの羽にはクジャクらしい目玉のかたちの模様があります。春から夏にかけての繁殖期、オスは尾羽を扇子のように大きく広げるディスプレイをしてメスに求婚します。当園のカップルも、繁殖に挑戦中です。ヒナに会える日が待ち遠しいですね。



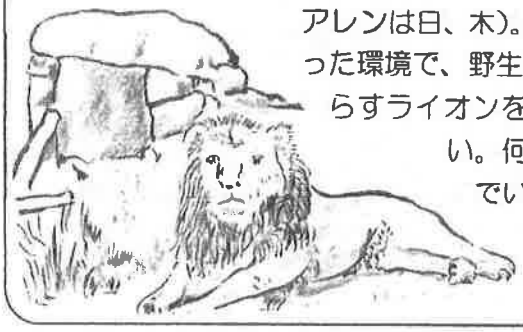
午後2時すぎから夕方にかけて、オスが手前の止まり木にとまって鳴くことがあります。そんな時は、羽の模様の美しい輝き、大きさや微妙な色合いのちがいなどを近くで観察できるチャンスですよ。独特な鳴き声も、ぜひ聞きに来てください。鳥類水系ゾーンのキジ舎で、ほかのキジの仲間といっしょに見られます。

⑤ 展示場のリフォーム完成

―アフリカライオン―

当園には２頭のライオンがいます。頑固でマイペースなトウヤと、人懐こいアレン。両方ともオスで、一緒にするとケンカをしそうなので分けています。アレンはガラス張りの展示場、トウヤはサバンナをイメージした展示場にいますが、こちらは今春改修され、飼育係や来園者の意見を取り入れて暑さ寒さに対応した作りになりました。岩山（アフリカ語で「コピエ」）の上は床暖房になっており、下の洞穴は直射日光をさえぎります。

野生のライオンは毎日は食事をしないので、当園でも週２回は絶食日にしています（トウヤは水、土、アレンは日、木）。より快適になった環境で、野生に近い姿で暮らすライオンをごらんください。何回も足を運んでいただけば、色々な姿を見られます。



⑥過酷な環境　家族で団結

― ミーアキャット ―

北ロゲートを上がると正面で来園者を出迎えてくれるのが、アフリカ南部の荒れ地やサバンナに群れで暮らすミーアキャットです。当園ではオス８頭、メス２頭を飼育しています。

立ち姿で有名ですが、ワシなどの鳥やヘビ、ジャッカルなど、多くの天敵に囲まれた厳しい環境で群れを守るため、交代で見張りに立っています。群れの第一順位のオスとメスのペアだけが繁殖することができます。

母系集団で、基本的にオスは生後1.5～2歳で群れを離れますが、メスは群れに残り、ヘルパーとして子守や授乳を行います。メスは子を産んでいなくても乳を出すことができ、幼い子どもたちにサソリなどの危険なエサの捕り方を教えるそうです。

★ボランティアが毎月第２、第４日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイド「ZOOボラ・クイズDEガイド」をしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

⑦歯がのびすぎないように　木をかじる

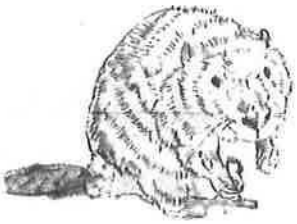
― アメリカビーバー ―

アメリカやカナダに生息し、げっ歯類（ネズミの仲間）としてはカピバラの次に大きい種類です。尻尾は船のオールのように平たい形で、後ろ足に水かきがあり、泳ぎが得意。潜水能力もすぐれていて、最大で15分も潜っていることができるそうです。

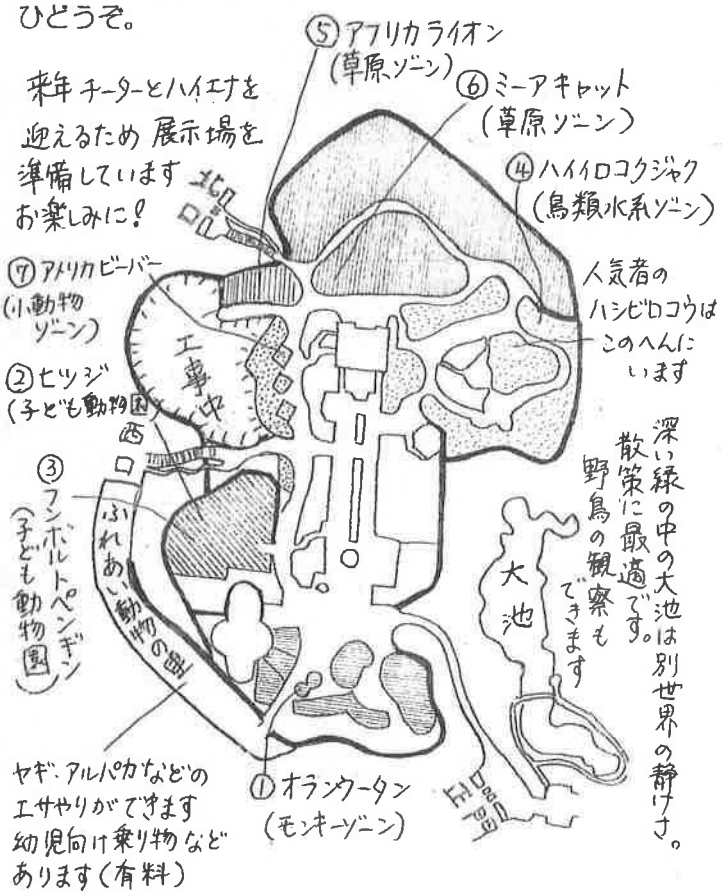
野生では家族で暮らし、一生伸び続ける門歯で木を切り倒し、ダムや巣を作ったりします。かじれるように、展示場には桜の木などが立ててあり、早い時は１本を15分程度で倒すこともあります。

当園にいるのは17歳のドンと息子のキン（３歳）と、２月にキンのお嫁さんとして迎えたマツコで、展示場には若い２頭が出ていることが多く、少し体が大きく見える方がキン、顔に黒いシャドーが入っているように見えるのがマツコです。

夜行性のため、比較的14時半以降に活動する姿が見られます。



★「絵本のおはなし会」が毎週土曜11時30分より動物科学館２階図書室で開かれます。小さいお子さんはぜひどうぞ。



第34号　（2019年冬～2020年）
編集・発行　千葉市動物公園ボランティアーズ

千葉市動物公園の ボランティアがえらんだ 見どころ7 セブンプラス

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください。

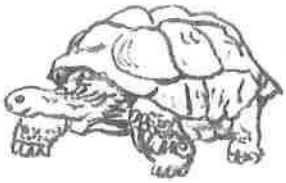
① イケメンのモンタと 口笛を吹くローラ
― ニシゴリラ ―

当園のゴリラは、オスのモンタとメスのローラです。通常ゴリラは頬まで毛が生えていますが、モンタは頬の毛を自分で抜いてしまうらしく、ツルツルでスッキリした顔。おまけに白いあごひげがあるものだから、かっこいいイケメンに見えます。一方ローラは、地面のミミズや虫を拾って頭にのせたり、機嫌がいいと口笛を吹いて遊んだりしています。口をとがらせていたら耳を澄ましてみてください。ヒューヒューという口笛が聞こえるかもしれません。ローラは人に育てられた期間が長いので、まわりの人の口笛をよく聞いていたのでしょう。

ゴリラは自分の名前が呼ばれると、呼ばれていることは分かるようですが、残念ながら返事はありません。気が向いた時だけこちらを見ます。

② ゆっくり成長　しっかり長生き
― アルダブラゾウガメ ―

こども動物園のゾウガメコーナーには、アルダブラゾウガメとケヅメリクガメがいます。ゾウガメは泥浴びが好きで、ケヅメリクガメは砂場で砂浴びをするのが好き。それにより虫などを落とし、体を清潔にしています。



一番大きなアルダブラゾウガメは60歳で体重が285㎏あり、小さい方の個体は年齢不詳で45㎏。ゾウガメもケヅメリクガメも180歳くらいまで生きると考えられています。

エサは草の他にハクサイやトマト・キュウリ等で、ゾウガメコーナー内にある桜の木の葉も好んで食べます。歩く時はしっかりと四本足で立ち、お腹を引きずらずに歩きます。足回りの皮膚は、六角形のハニカム構造となっており、重い体で歩く時の負荷を分散させています。

③ どなりあってるみたいだけど なかよし
― エリマキキツネザル ―

アフリカのマダガスカル島に住むエリマキキツネザル。フワフワした白黒の毛に包まれた体にとがった鼻、金色の目で、目立つ姿のようですが、森の中ではこの色がかえって目立たず、身を守っています。

朝、日が出るとお腹を日に当てて体を温めます。野生では果実、木の葉、花などを食べ、園でのエサはリンゴ、オレンジ、煮サツマイモ、煮ニンジン、固形飼料で、サルにはめずらしく手で持って食べず、犬のようにかがんで食べます。ウンチはさまざまな色で、何を食べたかわかります。ときどき大声でいっせいに鳴き出し、ケンカかと思われそうですが、仲間とのコミュニケーションをとっているだけ。よく聞くと1頭ずつ色々な声で鳴く、にぎやかなサルたちです。

④しっぽのハートが見えるかな？
― アカハナグマ ―

南米北部からアルゼンチンに至る広範囲の森林に生息するアカハナグマ。地上では鋭い曲がった爪で地面を掘り、よく動く突き出た鼻をつっこんで虫やミミズなどを探して食べます。樹上では爪と長い尾を器用に使い果実を採ります。雑食性なので園ではバナナ等果実や煮たサツマイモ・ニンジン、鶏頭、ドッグフード等を与え、おやつにはミルワームという幼虫を放飼場にまいています。輪模様のある長い尾はバランスをとるだけでなく、地上では立てて群れの仲間への目印としての役割もあります。

当園の2頭はどちらも2015年生まれの4歳。尾が短いのがメスのミミ、長いのがオスのヒカリです。このヒカリ君、尾を立てた時に♥マークが見られると人気急上昇中です。ゆっくり見て行ってください。

⑤背中の羽が　ふっさふさ

― ダチョウ ―

草原ゾーンの草原山で２頭飼育されています。オスが2010年にやってきた悠（推定１０歳）、メスが２００４年にやってきた蘭（１６歳）。オスは黒く、メスは薄茶色です。

日中は悠々と草を食べています。長い首の上についた三角の顔の両脇にある目は、案外親しみやすく、双眼鏡で眺めても飽きません。

季節によってカラスが巣材にするために羽を抜きにやって来ることがあるので、夕方から小屋に入れてもらい避難します。おかげで現在は背中の羽も美しく揃っています。収容の時は小屋の扉を開けると入っていくのですが、自分から入らないときも飼育係の方が展示場に入ってゆっくり近づいて行くと、ダチョウはちょっと考えた後、やがてすっと素直に小屋に戻って行きます。

⑥ポニーって、どんな馬？

― ウマ ―

ふれあい動物の里には色も大きさもさまざまなウマがいて、係員さんに引いてもらって乗馬を楽しむことができます（有料）。天候によって乗馬は中止になることがあります。雷が鳴ったりすると、ウマは臆病なので驚いて走り出してしまう危険があるためです。

子ども動物園にはシェットランドポニーがいますが、このような小さなウマが「ポニー」かと思いきや、肩までの高さが 147 ㎝以下のウマをポニーと呼ぶのだそうです。ふれあい動物の里には結構大きなポニーがいますよ。探してみてください。

★ふだんはジッとしている動物も、食事のときは活発に動きますし、何をどんなふうに食べるのか、意外な発見があるかも。「食事時間のお知らせ」の園内放送がきこえたら、行ってごらんになることをおすすめします。飼育係さんに質問できるチャンスもあります。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

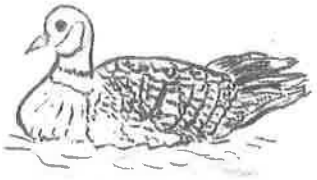
⑦動物園の努力で　絶滅から救われた

― シジュウカラガン ―

水禽池では色とりどりの水鳥が仲良く暮らしていますが、それぞれのバックグラウンドは多様です。中でもシジュウカラガンは絶滅寸前まで数が減ったところを、人間の努力で増やすことができた数少ない例です。

もともとアリューシャン列島で繁殖し米国で越冬する群れと、千島列島で繁殖し宮城県等で越冬する群れがいましたが、人間が毛皮目的で繁殖地に放したキツネに食べられて激減。1983 年から仙台市八木山動物公園を中心に、米国・ロシアと協力しながらキツネのいない島での放鳥をくり返し、近年では２千羽以上が日本に渡ってくるようになって絶滅の危機を脱しました。

首から上が黒く、あごに白いマスクをつけたような模様が特徴で、当園には８羽います。



★ボランティアが毎月第２、第４日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイド「ZOO ボラ・クイズ DE ガイド」をしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

第 35 号（2020 年春）
発行・千葉市動物公園ボランティアーズ

千葉市動物公園

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください。

①お父さんは　たよれるリーダー
― フサオマキザル ―

南米ボリビア周辺の森に住むフサオマキザル。野生では 8～15 頭で主に樹上で暮らし、フルーツ、木の実、小動物などを食べます。園ではパン、サツマイモ、ニンジン、キャベツ、小松菜、オレンジ、ヤマモモの葉、ミルワームなどを与えています。

展示場への出入りは順番が決まっていて、父親のカルロスを先頭に、赤ちゃんを連れた母カロリーナと子ども２頭が続きます。子どもの世話もよくみて家族を守っているカルロスは強そうな外見ですが、人と目を合わせないのも争いをさけるためで、おだやかな性格。好奇心旺盛で展示場の木の皮をめくって調べたりしています。知能、学習能力が高く、野生では石を道具に使い実を割ったりします。訓練により人間の介助をする事でも知られています。

②名前に似合わぬ　美しい鳥
― ヘビクイワシ ―

鳥類水系ゾーンにいる、黒いスパッツをはいたような足の長い鳥が、ヘビクイワシです。足でける力が体重の５倍近くあり、ヘビをけって弱らせてから食べることから、この名前が付けられました。体の全長は 100 ㎝～150 ㎝、つばさを広げると 200 ㎝、体重は２kg～４kg。アフリカ大陸に生息し、地上生活をしますが飛ぶこともできます。野生ではヘビのほか、昆虫、鳥の卵、ネズミ、ウサギも食べます。

当園のヘビクイワシは２羽ともここで生まれました。名前はありませんが、オスは 1997 年６月生まれで 23 歳、メスは 2006 年６月生まれで 14 歳になります。時々ゲゲ、ググと鳴きます。

樹上に巣作りをはじめました。卵が産まれるのを楽しみに見守りましょう。

③あれ…　ヤセた?!
― レッサーパンダ ―

野生のレッサーパンダがすむところは中国やインド、ミャンマーなどの標高 2000～4000m級の山で、竹が交じる森林です。夏でも涼しく冬はきびしい寒さとなる環境に生きるため、彼らは沢山の毛で体温を保ちます。レッサーパンダがモコッと見えるのはその毛によるもので、実は体は見かけほど大きくありません。当園のレッサーパンダの体重は平均して６kg 台です。４～６月ごろは換毛といって冬毛が抜ける時期にあたります。体のラインが普段よりも細めに見えるこの期間、他の季節と比べてみてくださいね。また毛の抜け方には個体差があります。風太は 16 歳となってやや毛はボソボソ、手足には白髪も見られますが、食欲旺盛・元気です！

④もこもこの美しい毛並み
― チンチラ ―

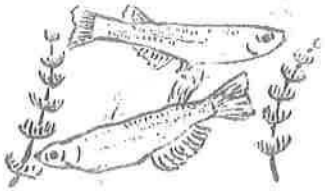
南米の山岳地帯に暮らすネズミの仲間。寒さや乾燥といったきびしい環境に適応するために毛は皮膚が見えないほど密集し、ひとつの毛根から細くなめらかな毛が 50～60 本も生えています。この上質の毛皮のために乱獲された悲しい歴史もありますが、今はワシントン条約で厳重に保護されています。野生では草や木の根や樹皮、サボテンの葉や根を食べますが、園では小松菜・生のニンジン・サツマイモ・干し草・ペレット等を与えています。一生伸び続ける歯をもつチンチラには噛み応えのあるエサが大切です。

展示場にある砂場での砂浴びは毛並みを保つための欠かせない日課。おっとりとして見えますが、11 時からのエサの時間や夕方になると本来の俊敏な動きや驚くほどのジャンプ力を見ることができます。

⑤日本のメダカは南北２種類に

― ミナミメダカ ―

子ども動物園の飼育センター内に千葉市の水生生物の展示があります。中央の水槽は、人とともに水辺で生きてきたメダカを中心とした展示です。この一群のメダカは、日本の南側に分布するミナミメダカです。学名オリジアス・ラティペスのオリザは稲を意味し、水田と関係が深いことがわかります。



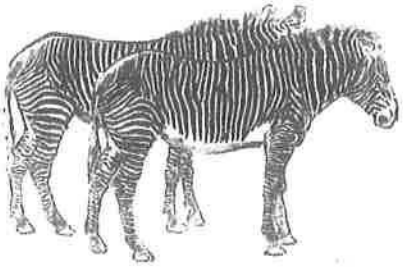
日本には、このほかに北日本に分布するキタノメダカがいます。このメダカが２０１２年に新種と認定され、これによって従来のメダカはミナミメダカという名前になりました。生息域が少なくなってミナミメダカは千葉県レッドリストで重要保護生物、環境省レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類の希少種となっています。

⑥ウマとのちがいはシマだけじゃない

― グレビーシマウマ ―

グレビーシマウマは、シマウマの中で一番大型で、縞模様が細かく、脚の縞がひづめの上まであるのが特徴です。ピンとたったタテガミ、丸くて大きな耳、ふっくらとしたお腹とおしりの曲線と、しっぽの半ばまで続く縞模様。見とれるほどの美しさです。

国内では７園で24頭が飼育されており（2018年の資料）、当園ではキャンディ（19歳メス）、カエデ（15歳メス）ライム（10歳オス）の３頭を飼育しています。



キャンディとカエデはとても仲良しで、カエデがキャンディを慕って後をついていくことが多いそうです。

動物公園では天敵がいないので、天気のいい日にはゴロンと寝ころんで昼寝をする姿がよく見られます。

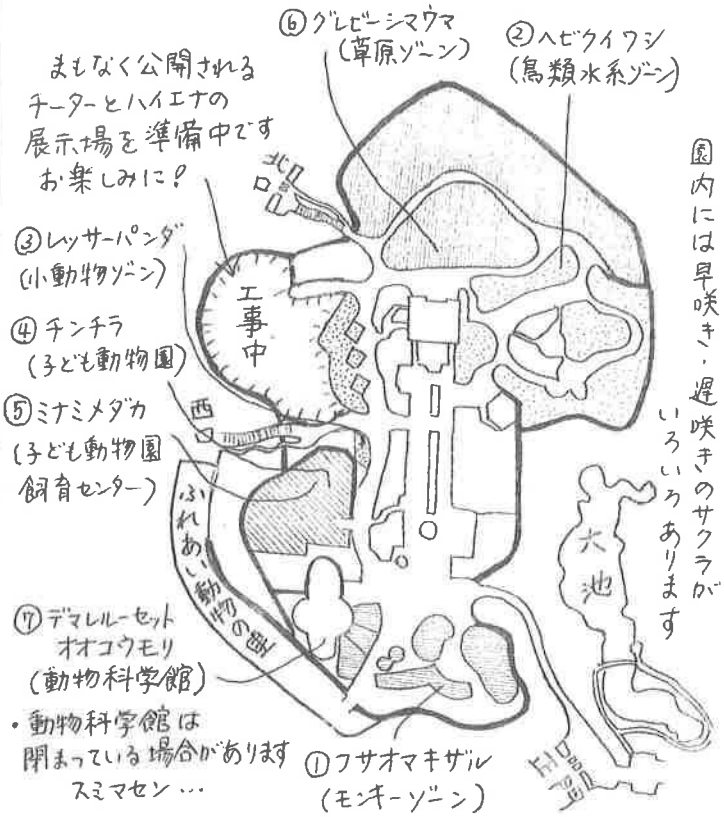
★ふだんはジッとしている動物も、食事のときは活発に動きますし、何をどんなふうに食べるのか、意外な発見があるかも。「食事時間のお知らせ」の園内放送がきこえたら、行ってごらんになることをおすすめします。飼育係さんに質問できるチャンスもあります。

⑦夜空を飛びまわるフルーツコウモリ

― デマレルーセットオオコウモリ ―

おもに東南アジアなどの洞窟にすみ、果物や花の蜜などを食べます。大きな目と超音波を使い、暗闇でも活動できます。

鳥のように空を飛びますが、ヒトと同じほにゅう類。くちばしはなく、歯があります。赤ちゃんは卵ではなくお母さんのお腹から生まれ、母乳で育ちます。コウモリはさかさまにぶら下がるので、子もさかさまのまま親にしがみついています。

つばさはうすい皮膚の膜でできていて、鳥のような羽毛はありません。その飛ぶための膜は長くのびた前あしの指と後ろあしの間にかけて張られたもので、透けてみえるのはヒトで言うと手の骨です。親指だけが短くかぎ爪で、頭を上げてトイレをする時などに引っ掛けて使います。後ろあしには、ぶら下がるため、かぎ爪の５本指があります。立ったり歩いたりはできません。

★オオコウモリのいる動物科学館の夜行性動物舎は事情により非公開とされている場合があります。ご了承くださいますよう、お願いします。